

k- 203

天童市埋蔵文化財調査報告書第5集

# 小関C遺跡

—発掘調査報告書—

1990

天童市教育委員会

## 序 文

この調査報告書は、天童市市道上貫津～山元間の道路拡幅改良事業にともない、天童市教育委員会が主体となり、天童市建設課の協力のもとに実施した「小関C遺跡」の発掘調査の結果をまとめたものであります。

今回の発掘調査は、平成元年度に実施された予備調査の結果をもとに行われたもので、住居址こそ発見できなかったものの、多くの遺物が発見されました。これから縄文時代中期の人々のくらしを解明するうえで貴重な一助となることと存じます。

近年、当市においても、開発事業等の増加にともない、埋蔵文化財の保護との調整をどのように計っていくかが大きな課題になってきております。このかけがえのない貴重な先人の遺産をどのように保存し、後世に伝えていくかは現在に生きるわたしたちの使命であります。

最後に、調査にあたって格別のご協力をいただきました地元の方々をはじめ、調査員の皆様ほか関係各位に対し、心から感謝申しあげます。

平成2年11月

天童市教育委員会

教育長 鈴木 徹

## 目 次

|                 |        |
|-----------------|--------|
| (序 文)           | 1 ページ  |
| (挿 図)           | 2 ページ  |
| (例 言)           | 3 ページ  |
| 1. 調査の経緯        | 4 ページ  |
| 2. 環境と周辺の遺跡     | 6 ページ  |
| 3. 発掘調査の方法とその状況 | 9 ページ  |
| 4. 出土遺物についての所見  | 12 ページ |
| (1) Aトレンチ出土の遺物  |        |
| (2) Bトレンチ出土の遺物  |        |
| 5. 結 言          | 14 ページ |

## 挿 図

- 第1図 予備調査の区域と遺物の検出地点  
第2図 小関C遺跡と周辺の遺跡  
第3図 トレンチ設定図  
第4図 Aトレンチ土層断面図  
第5図 Bトレンチ土層断面図  
第6図 Bトレンチ出土赤焼土器燈明皿、須恵器高台杯実測図  
第7図 出土石器実測図

- 写真1 小関C遺跡の遠景  
写真2 調査状況1  
写真3 調査状況2  
写真4 Aトレンチ土層の状況  
写真5 Bトレンチにおける縄文土器片出土状況  
写真6 Bトレンチ出土須恵器及び赤焼土器片  
写真7 Bトレンチ出土縄文中期土器片  
写真8 Bトレンチ出土主な縄文中期土器片  
写真9 Bトレンチ出土の石器

## 例　　言

1. 本調査報告書は、天童市市道上貫津、山元間の道路拡幅改良事業にともなう小関C遺跡の発掘調査概要である。
2. 発掘調査は、天童市教育委員会が主体となり、市建設課の協力のもとに実施した。
3. 調査要項
  - (1) 遺跡名 小関C遺跡（新規）
  - (2) 所在地 天童市大字貫津字小関
  - (3) 調査期間 平成2年3月30日～4月1日（3日間）
  - (4) 調査体制
    - 調査員 川崎利夫（主任）、山口博之、村山正市、石井浩幸
    - 作業員 地元地権者・関係者等
  - 協 力 天童市建設課  
(課長=木村光春、副主幹=奥山正一、主任=佐藤義光)
  - 事務局 天童市教育委員会社会教育課  
(課長=大沼利成、文化係長=今川文俊、主事=須藤妙子)
4. 本報告書の執筆及び図版作成は主として川崎利夫があたり、一部を山口博之が担当した。なお編集は、今川文俊、須藤妙子が行った。

# 1. 調査の経緯

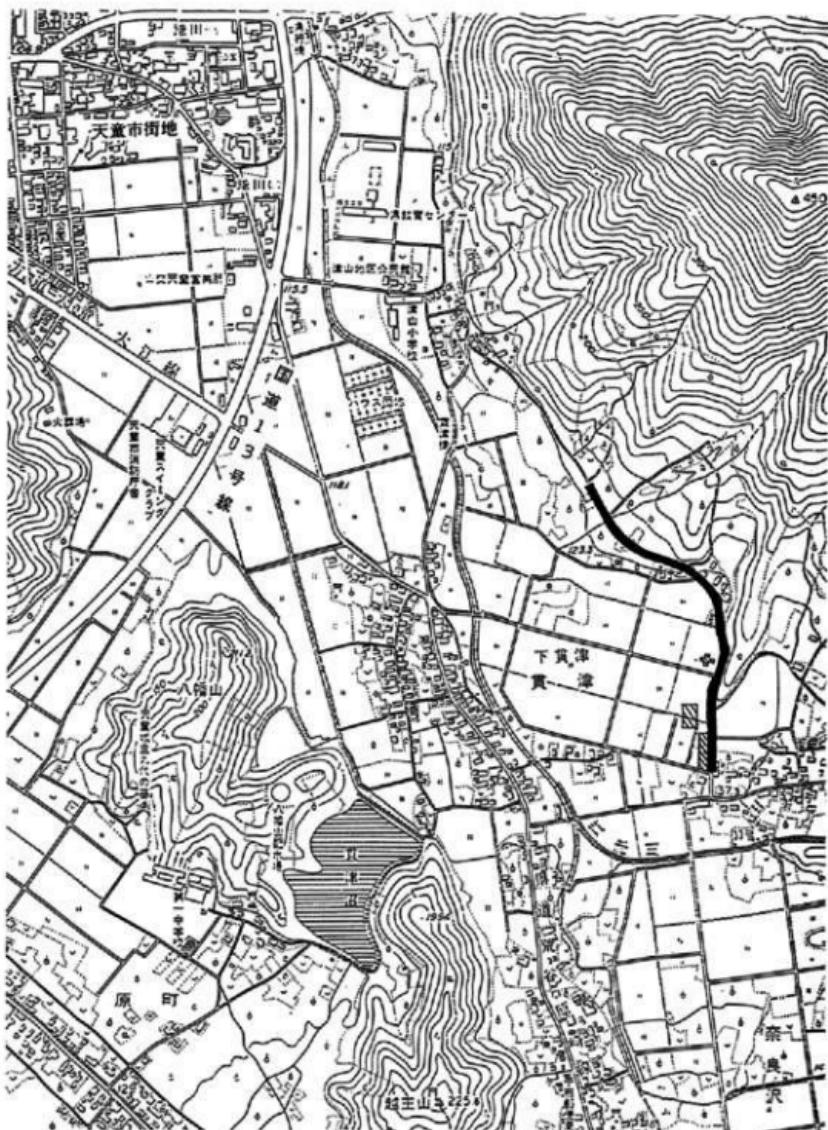
市道山元・上貫津間の道路拡幅改良事業にともない、当該事業にともなう埋蔵文化財包蔵地の保護については、文化財保護法57条にもとづき、事業主管課の天童市建設課と市教育委員会との間で、かねてから協議を行っていた。

工事着工を間近にひかえて、昭和63年10月28日より30日までの3日間にわたり、工事予定路線周辺の予備調査を行うことになった。これには、川崎利夫（市文化財保護審議会委員、日本考古学協会会員）を主任として、山口博之（山形考古学会会員）、村山正市（同会員）、石井浩幸（同会員）が調査員として、市教育委員会社会教育課文化係長今川文俊、同主事須藤妙子が補佐して調査を実施した。工事予定路線は、「山形県遺跡地図」（昭和53年、県教委）による遺跡の集中地域である。1100mにわたる区間に、1×1mのテストピットを設定し、遺構・遺物の確認につとめた。その結果、「石打場」（遺跡NO.306、墳墓）は、すでに失われその痕跡を残さなかったので、事前調査の必要がなく工事にも支障がないとの判断を下した。

さらに事前調査を進めたところ、NO.11, 23, 43 の各地点において、遺物の検出がみられた。11地点からは土師器片（平安時代）が少量出土したが、近くの遺跡からの流入と思われ遺構は検出されなかった。23地点からは、縄文晩期中葉の土器片が出土したため、拡張精査を行った。この地点は、昭和47年に実施された圃場整備の際に大方破壊されたが、たまたま残存した場所と思われ、再調査の必要はないとした。

43地点においてのみ、縄文中期の土器片とともに当時のものと思われる生活面が検出された。記録保存のために、工事に入る前に100m<sup>2</sup>にわたる発掘調査が必要であると認められたので、その結果を調査所見として関係各機関に報告した。

これに基づき、建設課と市教育委員会の協議の下に、発掘調査を実施することになったものである。43地点は、事前の予備調査時の地点番号に基づけば、山際の山崎遺跡群に対して小間B遺跡にもっとも近く、小間遺跡群に包括される遺跡と思われる。「山形県遺跡地図」によれば、小間A遺跡は縄文中期の集落跡として、同B遺跡は平安期の集落跡として登載されている。従って本遺跡は、上層より平安期、下層より縄文中期の遺物が出土しており、小間C遺跡と呼称すべきものであろう。



第1図 予備調査の区域と遺物の検出地点

## 2. 環境と周辺の遺跡

天童温泉のすぐ西にそびえる、三角形をした標高 450mの湯の上山は奥羽山系に属し、やや平地部に張り出す。この湯の上山の南麓は、市内でもっとも高い雨呼山から流下する貫津川によって形成された、小扇状地が開析している。扇頂部は両側の山地部に入り込んで、上貫津の集落が貫津川をはさんで存在する。

本遺跡は、上貫津集落の西側に位置し、標高 134m前後であり、湯の上山から南へ細長く張り出した、通称山崎山の南を占める。湯の上山のすぐ西麓を通る県道がその南麓をめぐって、さらに山崎山の西側を通って、山寺街道から東へ上る上貫津への道路の交差点に近い。発掘地点は県道山元・貫津線の西側の地点である。小関B遺跡は、道路をはさんだ



第2図 小関C遺跡と周辺の遺跡

- |           |           |            |
|-----------|-----------|------------|
| ○ 小関C遺跡   | 1. 中島館跡   | 2. 山崎山館跡   |
| 3. 新城山館跡  | 4. 山崎A遺跡  | 5. 山崎B遺跡   |
| 6. 山崎C遺跡  | 7. 山崎D遺跡  | 8. 小関A遺跡   |
| 9. 小関B遺跡  | 10. 亞弥陀堂跡 | 11. 御阿弥陀窯跡 |
| 12. 土生山遺跡 | 13. 上貫津遺跡 | 14. 大平山遺跡  |
| 15. 白山堂遺跡 | 16. 白山堂墳墓 | (10000分の1) |



写真1 小関C遺跡の遠景（A, Bはトレンチ設定箇所）

東側とされており、小関A遺跡はさらにその西側に位置する。

付近一帯は、昭和47年頃圃場整備が行われ、密集する遺跡の上層の大半は失われたものと思われる。

小関遺跡群は三方が山に囲まれ、すぐ南側を貫津川が流れ、西は開けた地形であるが、眼前に舞鶴山をはじめとした、いわゆる「出羽の三森」が望まれる台地上に位置する。同じく湯の上山南麓の台地上には山崎A・B・C・Dなどの諸遺跡が分布する。「山形県遺跡地図」によれば、それらの遺跡の番号・種別・年代は次の通りである。

|     |     |         |
|-----|-----|---------|
| 山崎A | 集落跡 | 縄文時代    |
| 山崎B | 集落跡 | 奈良・平安時代 |
| 山崎C | 集落跡 | 奈良・平安時代 |
| 山崎D | 集落跡 | 縄文時代    |
| 小関A | 集落跡 | 縄文時代    |
| 小関B | 集落跡 | 奈良・平安時代 |

山崎B・Cは、その後の調査によって平安時代の集落跡であり、小関Bなどにも続く一連の平安時代集落跡であることが明らかになった。また山崎Aは、小関Aとともにやや離

れているが、縄文時代中期末の集落跡である。山崎Aに近い「はなげ遺跡」は、後述するように中島館跡と呼ばれる中性の居館跡であるが、縄文時代の石窓や石塙なども出土しており、山崎Aとつながる縄文中期遺跡である。

中島館跡は、水田中に畠地として残されているが、中世の単郭方形館跡で、西側と北側に濠跡の痕跡をうかがうことができる。貫津集落の開発領主と考えられる貫津弥右衛門の居館跡と推定される。

小間B遺跡の背後に突出する小丘陵の山崎山も中世館跡であることが判明した。頂部が平坦で、二段の曲輪がめぐる。おそらく上貫津集落の南にそびえる新城山館跡に関連する見張台的な支城であろう。新城山は北と東に曲輪や空濠をもって構築された典型的な山城である。戦国時代の館跡と推定されるが、館主は詳らかでない。山麓を通る山元→貫津→奈良沢→山形への古道を意識した構えである。

山崎山の東側、上貫津集落の北側の台地にも数々の遺跡がある。おそらく近世まで建っていたと思われる阿弥陀堂跡があり、参道や基壇が残り、「南無阿弥陀物」の石碑が立っている。その近くの斜面には「御阿弥陀窯跡」があり、須恵器の杯などが出土している。窯の実態は不明であるが、底部の切り離しが糸切りであるところをみると10世紀前後の遺構と推定される。またその奥の土生山からは、縄文前期の土器片や石槍・石塙などが出土する遺跡がある。

さらに上貫津の奥の大平山には平安時代の祭祀信仰遺跡があり、土師器片などが出土している。県指定史跡「格知学舎」の奥の畠地からも縄文中期末の土器が出土している。上貫津遺跡である。そこから『ジャガラモガラ』へ向かう林道を山に入ると、市指定文化財の石造宝塔がある東漸寺廃寺跡があり、平安時代の土器はもとより石器などの縄文遺物も発見されている。

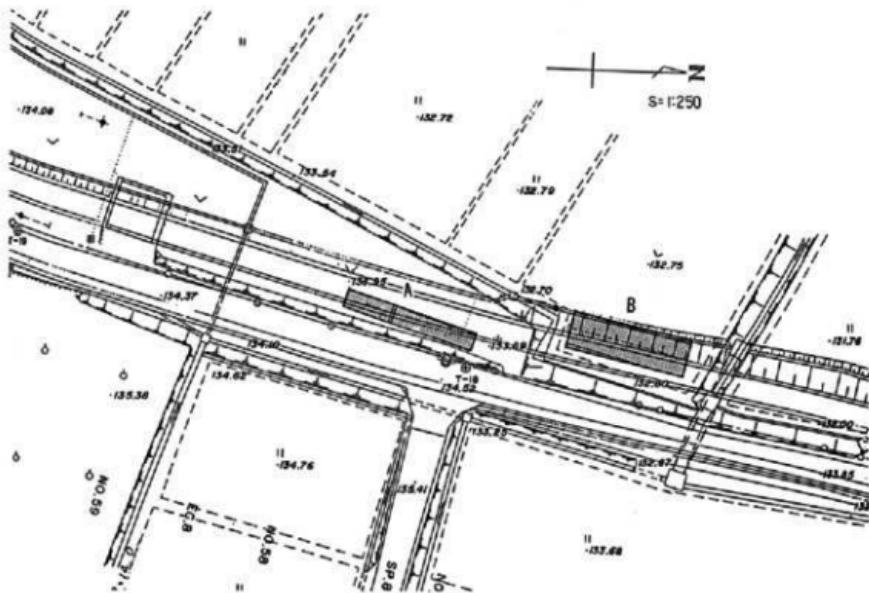
湯の上山、雨呼山、累石風穴として知られるジャガラモガラなどの山ふところに抱かれたこの周辺は、原始・古代から人びとの生活の舞台であるのみならず、地域の墓場としての信仰の場でもあった。

### 3. 発掘調査の方法とその状況

予備調査の際、縄文土器片がまとまって出土した地点を中心として、市道山元・貫津線の改良工事に当たって掘削や土盛りが行われる現在の道路の西側に、道路に平行して二箇所のトレンチを設定した。

調査は3月30日から4月1日まで3日間の日程で行われた。現在の水田面より約1m高い位置にあり、現在の道路面より50cm低い畠地の部分に、20m×2mのAトレンチを最初に設定した。ついで水田面に、15m×4mのBトレンチを設けた。発掘総面積は100m<sup>2</sup>である。Aトレンチにおいて位置がやや高位にある畠地を対象にしたのは、圃場整備などによって擾乱されない土層が残っていると考えたからである。

ところが地表下30cmの第1耕土層中に、遺物はほとんど認められず、Aトレンチを含む畑地は盛土によって造成されたものであることが判明した。その下層は旧水田面で、10~15cmで硬い盤に達する。盤は粘質土と疊によって構成される。遺物は盤の直上より十



第3図 トレンチ設定図

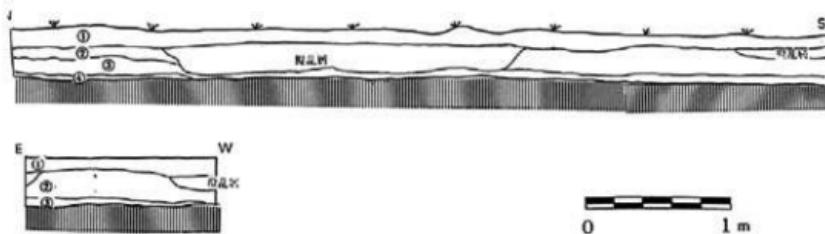
数片の須恵器・土師器・赤焼土器片などが出土したのみであった。道路をへだててその東側にある小窓B遺跡などからの流れ込みによるものと思われる。このように、Aトレンチからは予想に反して遺物の出土は少なく、遺構の発見もなかった。

従ってAトレンチの調査状況から、より高位にある畑地の調査を放棄し、Aトレンチ北側の下位水田面に2m×15mのトレンチを設定した。翌31日に、これをさらに2mずつ西側に拡張し、Bトレンチとした。Bトレンチは幅4m、長さ15mである。

土層の状態は、第1層が水田耕土で灰褐色粘質土が10~15cm、第2層が黄褐色粘質土、第3層が礫を含む青灰色粘質土で基盤をなしている。遺物は、第2層中より大部分出土した。縄文中期土器片と平安時代の土師・須恵・赤焼土器片などで、縄文時代の遺物は盤直上よりの出土が多く、第2層は10~15cmであるから、縄文時代の遺物と平安時代の遺物の層位的な上下関係は顕著でなかった。しかし、地表下25cmの盤直上に縄文時代の生活面があったものと思われる。その面から縄文土器片や石器片が多く出土したが、平安時代の遺物も混在しており、圃場整備事業などにより攪乱されたものと思われる。

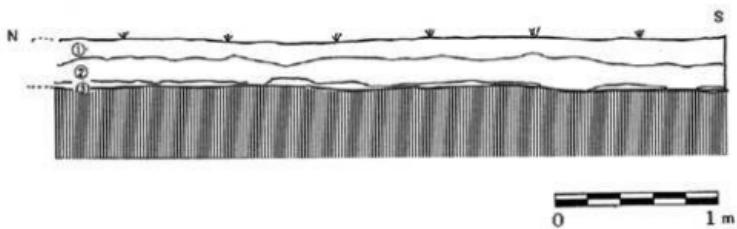
Bトレンチにおいても遺構の検出はなかった。

最終日の4月1日に、Aトレンチの埋め戻しとBトレンチの精査、図面とりを行い、全調査日程を終了した。



第4図 Aトレンチ土層断面図

- (1) 表土・・・黄褐色土
- (2) 暗褐色粘質土
- (3) 暗褐色粘質土
- (4) 基盤層・・・青灰色砂礫粘質土



第5図 Bトレンチ土層断面図

- (1) 表土・・・耕土（黄褐色土）
- (2) 暗褐色粘質土
- (3) 基盤層・・・青灰色粘質土



写真2 調査状況（Aトレンチ）



写真3 調査状況（Aトレンチ）

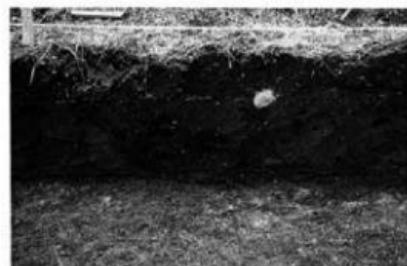


写真4 Aトレンチ土層の状況



写真5 Bトレンチの縄文土器片出土状況

## 4. 出土遺物についての所見

A・Bトレンチごとに、出土遺物についての所見を述べることにする。全出土遺物 245点中、Aトレンチは17点で甚だ少ない。これらはほとんど平安時代の遺物である。また全遺物中78パーセントは縄文時代の遺物である。

### (1) Aトレンチ出土の遺物

Aトレンチでは盛土下層及び第3層直上部より16片の土器片、1片の剥片が出土している。40m<sup>2</sup>よりこれだけの出土であるから出土量はきわめて少量といわなければならない。

須恵器片は5片で、いずれも壊の小片である。土師器片は2片で、煮沸用長胴壺の破片で輪積みの製作工程をうかがうことができる。赤焼土器は8片で、底部に糸切りの痕跡を認めることができる。他に表裏とも黒色の黑色土器片が出土しているし、剥片が1片認められた。

糸切りによる赤焼土器が多数出土していることから10世紀代後半の年代が考えられ、近くにある小間B遺跡からの流れ込みによるものと推定される。

### (2) Bトレンチ出土の遺物 (第10~15図)

発掘面積60m<sup>2</sup>より228点の遺物が出土している。80パーセントが縄文時代の遺物である。これも出土量は通常の集落跡に比べて多いといえない。

**須恵器**：18片、すべて小破片である。壊が主であるが、条線状叩目による壺や壺の破片もある。表裏朱彩あるものが1片ある。

**土師器**：赤焼土器：28片、小破片である。土師器と赤焼土器を小破片のため明確に区別できないので一括して扱う。土師器には小型の鉢や壺の破片が多い。赤焼土器は大半が壊で、糸切り底である。それに小皿風のものや背の低い高台付壊とみられるものがあるところから10世紀も後半の時期の遺物とみられる。(写真6 第6図)

**縄文土器**：158片で最も多い。隆起線による渦巻文や曲線・直線の文様がうかがわれ、磨り消し状の縄文もあり、縄文中期後半大木8**式**から9**式**に該当するものと思われる。波状口縁の山型の部分の渦巻文、キャリバー型深鉢型土器の口縁部なども認められる。縄文は、単節斜行縄文が主である。これらは多く盤(第3層)直上より出土したが多く、そのあたりが縄文時代の生活面であったと推定される。しかし、造構が検出されなかったところをみると、このあたりは

集落跡が近くにあるにしても、その周辺部であったと考えられる。なかに1片半截竹管による平行沈線や連続瓜型文の土器片があり、このあたりの集落にもっと古く遡るものもあった可能性がある。（写真7、8）

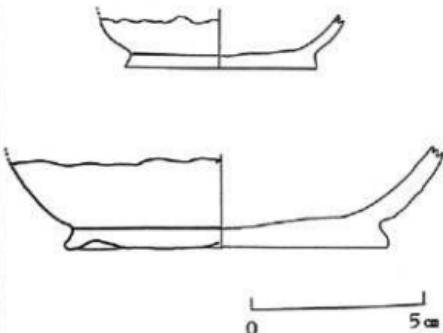
### 石器

石器：34片の石器片が出土しているが、多くは珪質頁岩製の剥片である。中にやや加工を施した小石刃状のもの、石鎚の基部片、円型の搔器がある。石鎚は無茎であるが、先端部が決失している。搔器は旧石器時代のラウンドスクレーバーに類似し、背面は縁片部の全面を細かく剥離して加工を施し、腹面は剥離面として平坦である。いずれも縄文中期に伴う石器であろう。（写真9、10）



写真6 Bトレーニング出土須恵器（右）

及び、赤焼土器片（左）



第6図 Bトレーニング出土の

赤焼土器小皿（上）

須恵器高台杯（下）

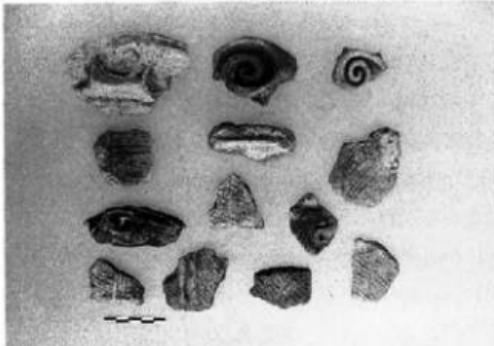
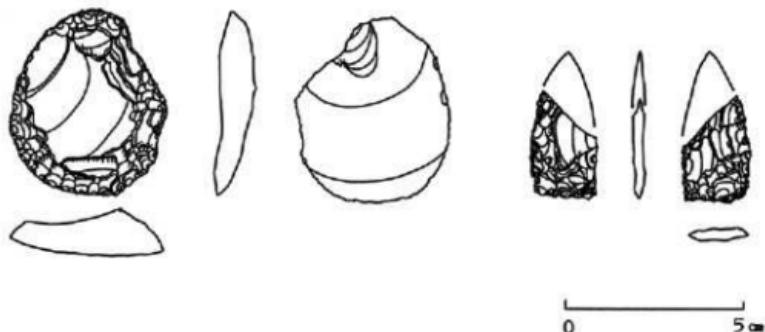


写真7 Bトレーニング出土縄文中期土器片



写真8 Bトレーニング出土縄文中期土器片



第7図 出土石器実測図

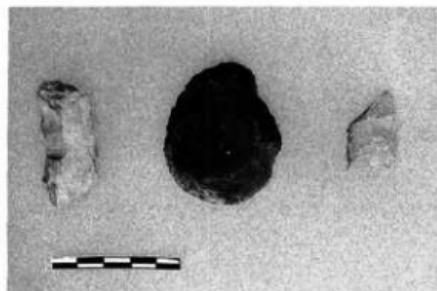


写真9 Bトレーニング出土の石器

## 5. 結 言

小関B遺跡の西側に位置する本遺跡は、小関B遺跡のように平安時代の遺物を主体とするものではない。むしろやや離れた場所にある小関A遺跡に関連をもつようである。従って本遺跡を小関C遺跡と呼称しよう。しかしながら山崎A、小関Aは、ともに縄文中期末の遺跡であり、一連の集落跡と考えられる。しかも発掘箇所に遺構がなかったところをみると、竪穴住居跡などが存在する集落跡の周辺部にあり、石器や土器の出土もそれを示している。この度の発掘調査によって、遺跡の時期と文化内容の一端が明らかになった。

小関C遺跡は、平安時代との複合遺跡ともみられるが、平安期の遺物が少なかったので、小関B遺跡などの集落跡から流れ込んできたものであろう。本遺跡は、近傍にあるであろう竪穴住居跡などの周辺に存在する、縄文中期末の生活面を明瞭に残す遺跡である。

天童市埋蔵文化財調査報告書第5集

小関C遺跡  
発掘調査報告書

平成2年11月

発行 天童市教育委員会

山形天童市野森1丁目1番1号

印刷 大風印刷

